

「新之助」生育速報 No. 5

令和元年7月10日
村上農業普及指導センター

1 生育調査ほ・実証ほにおける生育状況（7月10日現在）

生育等の概況

草丈:並 茎数:やや多 葉数:並~やや遅 葉色:並

- 一部ほ場間差があるが草丈、葉数の進み、葉色はほぼ平年並
- 中干し開始遅れなどで過繁茂となっているほ場では褪色が進んでいる
- 各地で葉いもちの発生が認められる

新之助生育調査ほ・実証ほの調査結果（7月10日現在）

調査場所	田植日	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
関川村下関(関川)	5月21日	41	571	9.3	35.3
村上市牛屋(神林)	5月15日	52	578	11.3	36.7
村上市岩沢(朝日)	5月22日	51	724	11.5	33.4
平均	5月19日	48	624	10.7	35.1
指標値	5月15日	47	585	11.9	35.0
【参考:前年平均】	5月17日	52	512	11.1	34.8

2 今後の技術対策

当面の管理のポイント

◎水管理

- ・中干し終了後（出穂1か月前の7月15日頃には終わらせる）は、**間断かん水とし、幼穂形成期以降は飽水管理とする。**特に減数分裂期から出穂・開花期にかけて最も水が必要となるので、水不足にならないようにする。
- ・異常高温、強風、フェーン時には速やかに湛水し、**稲体の急激な蒸散防止**に努める。
- ・異常低温が予想される場合には一時的に深水とし幼穂を保護する。
- ・輪番給水地域は、気象予報等に十分注意し、これらの異常気象が予想される場合は**給水可能な日にあらかじめ十分湛水**するなど事前に対応できるよう水管理に努める。

◎幼穂形成期の確認

- ・ 幼穂形成期（幼穂長が平均 1mm 以上となった時期：出穂の 23 日前）を必ず確認し、穂肥施用が遅れないよう準備する。
(※現在の予想では、幼穂形成期は、管内平均で 7 月 24 日頃)

◎穂肥施用

- ・ 穂肥については、出穂前 21 日～18 日（1 回目：幼穂長 5～10mm）と 12～10 日前（2 回目：葉耳間長 0 cm）の 2 回に分けて施用する。
- ・ 穂肥量は、1 回当たり 1kg/10a とし、合計 2 kg/10a 施用を基本とするが、地力や生育状況、気象予報から判断して、1 回当たり 1.5kg/10a を上限に施用量を調節し栄養凋落を防止する。
- ・ 出穂 10 日前以降の穂肥は、食味を低下させるので原則施用しないが、異常高温（猛暑）で栄養凋落が予想される場合には、追加の穂肥も検討する（全量基肥肥料の場合でも、葉色低下が激しい場合は追肥を検討する）。
- ・ 有機質 100%肥料での穂肥施用はしない。

◎いもち病対策

- ・ 新之助の一部で葉いもちの発生が確認されている。ほ場をよく観察し、葉いもちの発病を認めた場合には、直ちに防除する。
- ・ 穂いもちのほ場抵抗性は「弱」でわたぼうし並に弱い。
- ・ 穂いもち防除は、葉いもちの発生がない場合でも、出穂前の適期に粒剤の水面施用、又は、粉・液剤で 2 回（出穂期直前と穂揃い期）の散布を実施する。
- ・ 共同防除は、新之助の防除適期と合わない場合が多いので、その場合には、新之助に合わせて個別に防除を行う。

◎カメムシ対策

- ・ 共同防除でカメムシ防除が実施されている地区では、基本的には追加防除の必要はないが、多発生条件では追加防除を行う。
- ・ カメムシ類の生息場所をなくすため、農道・畦畔の定期的な草刈りと水田内に残ったヒエやホタルイの抜き取りを徹底する。